

『アレクサンドリア四重奏 I ジュスティーナ』

ロレンス・ダレル著／高松雄一訳

河出書房新社／2,520円(税込)

### 世界文学の至宝、遂に復刊 長大な「四重奏」への第一歩

文・山形浩生

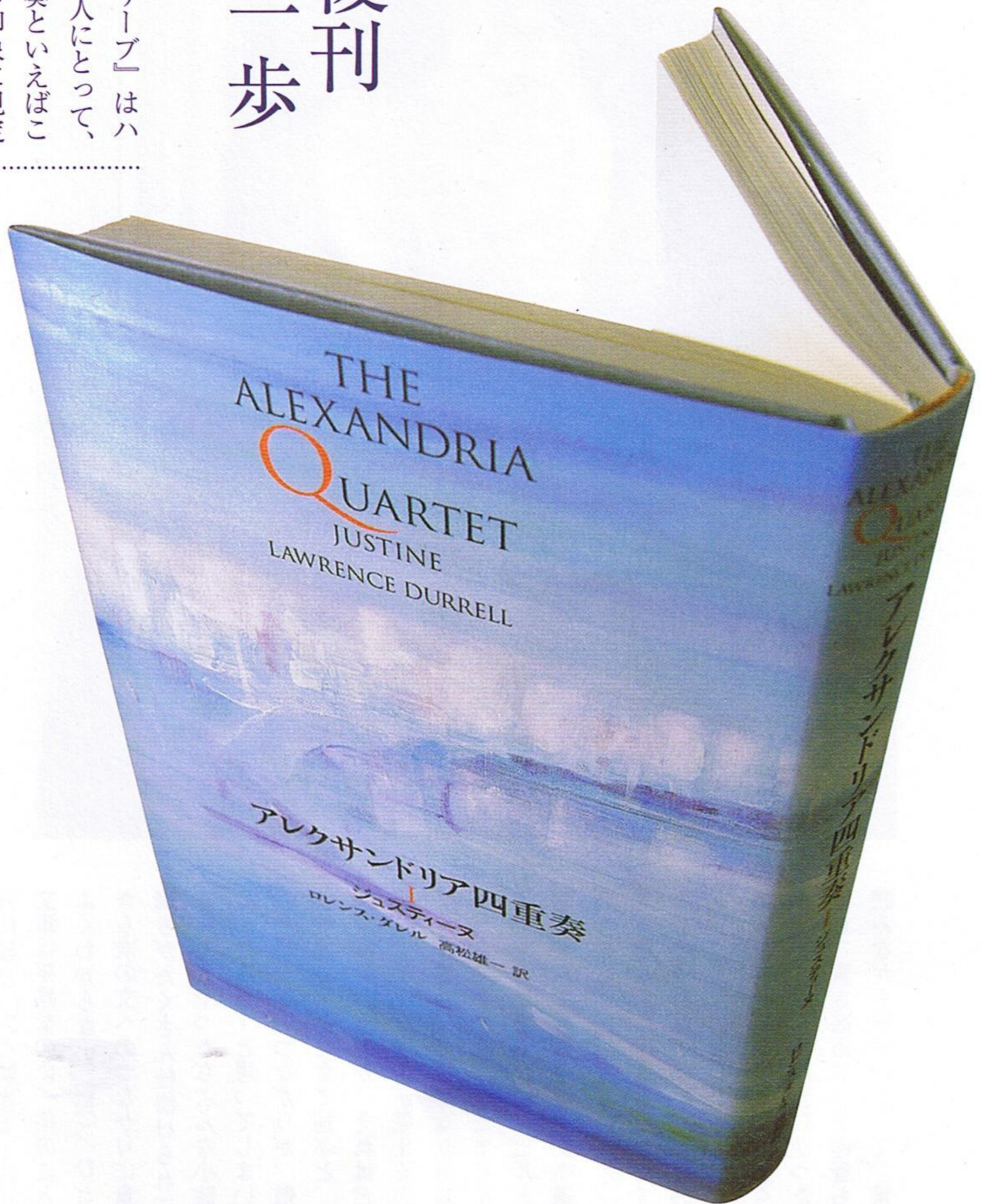
ページを開いた瞬間にあたりの空気まで一変する——そんな小説があり得るのだ、というのをほかに教えてくれたのがロレンス・ダレルだった。それは本当の意味での「風景」というものを考えるきっかけともなってくれた。物理的な刺激——映像、音、匂い、空気の温度や湿度から成る触感——にとどまるものではない、人の経験や思い出、記憶とからみあった、人の心の中にしかない「場」としての風景。それが紙のページから立ち上ってくる様子は、他の作家にはほとんど例がない。

この『アレクサンドリア四重奏』は、そのダレルの代表作であり、真の意味での風景を具現化した希有な小説となる。

とはいっても、全4巻に及ぶアレクサンドリア四重奏——『ジュスティーナ』『マウントオリブ』『バルタザール』『クレア』は長い。1巻進むごとに読み終えた人間は半減す

る(特に『マウントオリブ』はハードルが高い)。多くの人にとって、アレクサンドリア四重奏といえどこの『ジュスティーナ』の印象に規定されている。

この『ジュスティーナ』は、4巻の中で最もナルシズムに満ちた感傷的な小説ではある。客観的に見ればこれは、金持ち有閑マダムのお遊び相手としてふりまわされた貧乏三文作家の自己憐憫にまみれた回想記でしかない。恋人がいながらその人妻に走ってしまう自分の下半身のだらしなさを、語り手は都市のせいだといいつのる(相手の人妻も共謀して、その情事自分たちの意志とは無関係なのだ)と強弁する。それを取り巻く風景描写の過剰な華やかさのおかげで、それは実にもっともらしく聞こえる。その風景の中に置かれた人々は、一様に悲しく、惨めで、自分より大きな力につき動かされ、心ならずも何らかの役割を演じさせら



れているかのように見える。そしてそれこそまさに本書の魅力なのだけれど、でももちろんその相当部分の不倫カップルの弁明にすぎない。そして語り手もそれに気がついてるからこそ、アレクサンドリアからの脱出にあこがれるのだし、だからこそダレルも、本書とほとんど同じ状況をまったく別の角度から次の2巻かけて語り直さなくてはならないのだ(そして4巻目『クレア』で展開されるいささかご都合主義的な、強引なドラマづくりは……)。

だが、それはずいぶん先の話だ。初めて本書を読む人は(よほど非情な人でない限り)、たぶんそこでなぜダレルが次の2巻を必要としたか、さっぱり理解できないだろう。本書の華麗さ、美しさは、その自己憐憫的な感傷と見事に調和して、これ一冊では完璧な世界を作り上げている。会話だけで話が進む最近のラノベ読者ごときでは、この世界の歪みを見つけ出すことはほぼ不可能と言つていい(もちろんかれらがそもそもこれだけ密な世界に耐えられればの話ではあるが)。

その意味で、本書はあなたが四重奏の先へ進めるかどうかのふりいでもある。繰り返し読んで、この世界をソロで味わいつくしてほしい。本書はそれに十分応えてくれる一大傑作だ。だがいつか、その世界の虚構性に気がついたとき、あなたは真の四重奏へと向かう準備ができたことになるのだ。 **1**



### 『御緩漫玉日記』③

桜玉吉著／エンターブレイン／882円(税込)



### 『ひとりずもう 漫画版』①

さくらまき著／

ネット発の話題のエッセイコミック『ぼく、オタリーマン。』で、作者・よしたにが尊敬する作家として名前を挙げる桜玉吉。作者が描き続けてきた“日記漫画”シリーズの最新作『御緩漫玉日記』が完結を迎えた。妻子と別れ、都下の町で漫画を描いて暮らすお笑い漫画家・桜玉吉。そのおかしくもやるせない生活を、回想や妄想を織り混ぜてつづったのが本作だ。絵柄の描き分けにも顕著だが、青年劇画のダウンナーな重さと少年ギャグのアップナーな軽さが混在していて、これぞまさに人生。

家・つげ義春のホームグラウンド。この味わい深さ、桜玉吉がつげの申し子なら、さくらもこは出身誌『りぼん』の大先輩・陸奥A子の申し子だろう。自著エッセイの漫画化『ひとりずもう』は作者得意の笑い以上に、叙情性が前に立つ。よるべない10代の繊細さと愚鈍さ。作者の真髓ここにありだ。侘び寂びの効いた日本の日記文学と漫画文化の融合こそ、エッセイコミック。ふたりの“サクラ”が教えてくれるのは、その豊かさだ。自虐の笑いではなく、自省の笑い。そのニヒリズムこそ